

「人がまんなかのまちづくり」「人にやさしい人づくり」をめざす前田邦博のネットワーク通信

ほのぼの通信 No.4

子どもがまんなかの街づくり

子どもに教えられたこと

中学生と話をする機会がありました

参加してくれた子どもたちは、長い時間にも関わらず、協力的な態度で熱心に話を聞いてくれました。僕自身の緊張が伝わったのか、ぎこちなさもありましたが、協力してくれて、感謝しています。

自分の母親の痴呆症の話から始めて、障害や差別のことを話し合いました。赤ちゃんの時はみな、「完全看護が必要な重度の障害者」だったし、年をとると、介護が必要な「障害者」になる可能性があります。事故や病気で障害者になるかもしれません。つまり、私たちみんなは、障害者だったし、いつかは障害者になるのです。残念ながらこの社会には障害者にたいして差別があります。そういったことを子どもたちに伝えてから、「どうしたら差別をなくしていけるのか」などを話し合いました。

本音の話をするには

一方的な話にはしたくなかったので、質問をしながら進めていったのですが、どの質問にもまじめに答えてくれました。ただ、もっと本音の話ができればよかったとも思っています。「本当の気持はどうなの？」「本当にそう思っているの？」と議論を深めれば良かったと反省しています。

もっとも、本音の話をするためには、信頼関係がないとできないですね。「この大人は信頼できるのかな」と常に問われているのです。私と生徒のみなさんとの間に大人と子どもとの垣根がないように努めました。しかし、もっと時間をかけ子どものペースでやらないとなかなか心を開いてくれないでしょう。そして、私というものをもっと見せる必要もあります。そのためにも、子どもたちと過ごせる時間を持ち続

けたいと思いました。

差別のない社会は可能なのか？

最後にみんなの夢を聞きました。その後で、自分の夢は「差別のない社会にすること」だと伝えました。終わってから会場を出ると、1人の子どもが近づいてきて「きれいごとなしで、差別のない社会にできると本当に思っているの？」と聞かれました。私は「とても残念だけど、僕が生きている時代では差別のない社会を見届けることはできないかもしれない。でも、なくす方向に向けて進んで行かなくてはいけないよね。時間はかかるかもしれないけど、いつかはなくなると思っている。」と答えました。

この質問にはどきっとしました。「口ではきれいごとを言っていていても、実際には差別したり偏見を持って人と接していないのか？」と問われているのです。大人に対する不信感であり、若い人たち自身の無力感やあきらめからきているのでしょう。この問いには、私は今後どう行動するか、どう生きていくかで答えなくてははいけません。

絶望感を希望に変えるために

大人の社会を見通しても、汚職や不正行為、長期にわたる不況の下、リストラや競争の激化等が起こっています。そのように、人が他の人を犠牲にしてまで生きのびようとしてしまうのは、孤独感と絶望感から来ています。自分一人でやらなくては、誰も助けてくれないという孤独感です。そして、社会でどんなにひどいことが起こっていても、自分の力では変えられないんだと思ってしまう絶望感です。

若い人たちの無力感やあきらめを癒すためには、いくつになってもあきらめずに夢に挑戦し続ける大人がいることを示すことです。挑戦す

る前にあきらめさせようとする社会を、失敗してもやり直せる社会に変えていきたいのです。私は今まで、「気づいた人が声を出し始めなければ」と、自分に限界を設けずに行動し続けてきました。まだまだやりたりないことも、これからやりたい夢もいっぱいあります。やってきたことは、ささやかなことですが、こうした小

さな積み重ねをすることで絶望感を希望に変えたいです。

なお、囲みの文章は、中学生のみなさんへ向けて、当日配った手紙です。身近にいる子どもたちに見せてあげてください。(子どもたちの考えなど送ってもらえたら嬉しいです)

わか 若いみなさんへ

- あなたは大切だよ。あなたが生まれてきてくれて、本当によかった。いつでもあなたの味方だよ。そして、あなたが感じていることは、とても大事なことだよ。どんな気持ちでも受けとめたいな。
- あなたは、あなただけの価値を持った特別な存在だよ。あなたは、ほかの誰でもないあなた自身だもの。そのまま、すてきだよ。ほかの誰かになろうなんて、思わなくていいよ。
- どの人も、賢くて、愛情に満ちていて、協力的で、創造的で、そして人間的な存在だよ。世界には、たくさんの人が生きていて、ひとりひとりがあなたと私のように、かけがえのない存在なんだよ。
- あなたは強いし、大きく強くなっていくよ。思いっきり遊んでいい、たとえ傷ついても、完全に立ち直っていくから。
- たくさん友だちをつくってね。あなたと友だちになりたいと思っている人はたくさんいるし、あなたも友だちになりたいよね。友だちになりたいと思う人とは、誰とでも仲良くしていいよ。
- ひとりぼっちでいる必要は、絶対にないよ。たくさん友だちをつくっていいし、仲良くなったなら、いつまでもいつまでも、一緒にいていいよ。
- なんでも学んでいいよ。あなたが解決できない問題や手に入れることのできない技術は何もないよ。あなたは、とても賢いから。
- 何にもあきらめたり、挑戦することをやめなideいいよ。一番大きな夢を追いかけてね。誰も、あなたをあきらめさせることはできないから。
- 自分の考えを信じていいよ。ほかの人の話をよく聞いて、自分の考えを伝えていい。わからなければ「わからないから教えて」と言って、必要な情報を得た上で、自分にとって何が本当に正しいことが、決めていいからね。
- 自分でなんでも決めることができるよ。自分のために一番いいと思う生きかたを選んで生きていってね。ほかの人は、その人なりに選択するから、あなたは自分のために自分で選んで決めていい。
- 大切にされなかったり、無視されたりすることは、絶対に許されないことだ。人が誰かを傷つけるのは、その人が昔、気持ちを聞いてもらえなかったり、傷つけられたためなんだよ。
- 今の社会には、解決しなければならない問題が、山ほどある。たくさんの人が傷ついているために、お互いを大切にすることができなくなっている。でも、どうしたらこの状況を変えることができるのかを、真剣に考えている人は大勢いるし、一緒に手を取りあって何かしようとしている。世界を変えることは、必ずできる。そして、あなたにも手を貸してほしい。

僕の介護日記

痴呆ちほうのことや介護かいごのことを話はなします

文京区の知的障害者福祉施設に関して思うこと
新聞の報道等でご存じの方も多いでしょうが、文京区内の知的障害者通所施設において、国や区から支払われる運営費補助金を水増し請求したり、「口に粘着テープを貼る」など、通所の障害者への「体罰的な行為」が行われたと、文京区の調査会による報告が1月に発表されました。

こころの問題を取り扱うカウンセラーとして、そして、痴呆症という知的障害の母を持つ身として思わされることがあります。

こうした事件に直面して私たちがしなければいけないことは、あやまちを二度と起こさないためにはどうしたらいいのかを見つけ出すことです。そのためには、事実の解明は重要です。そしてもっと重要なのは、なぜこの事件が起こったのかを知ることです。原因や問題の構造を見通して始めて解決策が考えられ得るのです。

そして、個人を責めないということも大事です。親にせいだとか、職員のせいだというのは簡単ですが、それではなにも解決しないのです。親も職員も、現在の状況の中で精一杯やっているのです。誰かを罰したり責めたりするのではなく、問題を作りだしている仕組みを変えなくてはならないのです。

体罰を生む構造

「体罰的」行為が行われたり、専制的な運営が行われるのは、施設と利用者間に上下関係があるからです。福祉サービスが不足しているために、利用者には選択の余地がないので、施設は常に強い立場に居続けます。十分な福祉サービスと、一人一人に合わせた多様なサービスを作っていく必要があります。

そして、職員の待遇が厳しいことも原因の一つです。働いている人が大事にされていなければ、弱い立場にある利用者には、しわ寄せがいつてしまいます。良いサービスを提供したくても、それだけの余裕がないわけです。

「しつけ」を強いられる社会

どんな親も子供には幸せな人生を送って欲しいと願っています。だからこそ、子どもを社会や集団に順応させなくてははいけないとの思いがあります。そうでなければこの世の中で生き延びられないと思われています。痴呆症の母を見て分かるのですが、健常者中心となっている社会や集団に、障害者の方が合わせることはとても困難です。本来健常者が合わせるようにしてはいけないのです。つまり、私たちがしなくてはいけないのは、知的障害者に酷な社会の方を変えて行かなくてははいけないのです。すべての人を含めた、仕組みづくり、街づくりをしなければ、障害者(そしてすべての人)は「社会への適応」という名目で抑圧される続けるのです。

社会全体で負わなければならない責任

今まで知的障害者とその家族のことに無関心であり、関わりを持ってこなかった私たちみんなが今回の事件について責任を負っています。今日まで、知的障害者とその家族は、隔離や排除をされてきました。ですから、私たちが追いつめてしまったともいえます。

この事件は、社会全体の仕組み含めたシステムを作り替えなくてははいけないという警告です。今回の事件で障害者に対する施策が後退しないように、今まで以上に行政や地域住民が関わらなくてははいけないのではないのでしょうか。

前田くにひろのプロフィール

1965年11月9日文京区に生まれる（現在33歳）。

第一幼稚園、誠之小、文京六中、早稲田大学高等学院、早稲田大学法学部卒。

88年住宅・都市整備公団に入社。母の介護問題（アルツハイマー病による痴呆症）に直面し、福祉や心理分野への関心が高まり、96年より約8年間のサラリーマン生活を終える。以降、都内を中心に全国各地でカウンセラー養成講座の講師を行い、普及のかたわら、痴呆の方の介護家族を支える活動や不登校の問題、男女共同参画社会に向けての活動を行う。

99年4月の統一地方選挙で無所属の新人として挑戦し、文京区議会議員となる。

（すきなこと）

料理、子どもと遊ぶこと、犬と散歩すること

（趣味）

水泳、サイクリング、映画鑑賞（最近「パッチ・アダムス（ロビン・ウィリアムス主演）」を見ました。おすすめです。）

（尊敬している人）

マハートマ・ガンジー（インド独立の父）
中坊公平（債権整理回収機構）

（信念）

「人にやさしい街づくりには、人にやさしい人づくりが必要」



編集後記

- ・「ほのぼの通信」は、前田邦博が現場の声を伝えていく通信として、今後も発行していきます。文京区議会での活動のレポートに関しては、6月の議会が終わってから、別の通信として報告します。
- ・自分の現場の声を伝えたいという方は、ぜひその体験をお寄せ下さい。郵送、ファックス、電子メールなどをお願いします。
- ・読みやすいように字を大きくしました。そして、もっと多くの人に読んで欲しいという思いから、一部にルビもつけました。読みやすさについてもご意見をお待ちしております。
- ・電子メール版の「ほのぼの通信」を発行しています。希望される方は、honobono@be.toまで、その旨お伝え下さい。（会としても、経費節減になって助かります。）
- ・編集、発送作業、印刷などを手伝って下さるボランティアの方を募ります。会まで気軽にご連絡ください。
- ・ホームページのURLが新しくなりました。<http://www.interq.or.jp/world/maeda/>
- ・「ほのぼの通信」のバックナンバー（1号～3号）の在庫もいくつか残っていますので、必要な方はご連絡ください。

編集・発行：前田邦博と文京を楽しくする会
〒113-0032
東京都文京区弥生1-6-5 高尾ハイツ401
電話：03-3818-3191（留守番電話）
ファクス：03-3818-3191
E-mail:honobono@be.to
<http://www.interq.or.jp/world/maeda/>
郵便振替：00190-0-106455